

IL VULCANO

日記原本 2(仮) 15/11/06

1901 夏目漱石

一月二十三日(木) 昨夜六時半女皇死去す。At Osborne. Flags are hoisted at half-mast. All the town is in mourning, I, a foreign subjects, also wear a black-necktie to show my respectful sympathy. "The new century has opened rather inauspiciously," said the shopman of whom I bought a pair of black gloves this morning.

1901 夏目漱石

一月三十日(水) 善き天気なり。世間知らずの英国の女にはこまる。或る婆さんは御前は superstition という字を知っているかと尋ねた。下宿の神さんは tunnel という字を知っているか問た。呆れて物が言えぬ。

1901 夏目漱石 c

一月三十一日[木] 下宿の神さんがそんなに勉強して日本へ帰ったらさぞ金持になるだろうといった。好笑。

1901 夏目漱石

三月二十一日[木] 文部省より送金なし。大困却。
英人は天下一の強国と思えり。仏人も天下一の強国と思えり。独乙人もしか思えり。彼らは過去に歴史あることを忘れつつあるなり。羅馬ローマは亡びたり。ギリシャも亡びたり。
日本は 未来はいかがあるべきか。自ら得意になる勿れ。黙々として牛の如くせよ。内を虚にして大呼する勿れ。真面目に考えよ。誠実に語れ。汝の現今に播く種は、やがて汝の収むべき未来となって現わるべし。

1902/5/5 正岡子規

“病床六寸” これが我が世界である。 ちょっと見たいと思う物を挙げると、

- 一、活動写真
- 一、自転車の競争及び曲乗り
- 一、動物園の獅子及び駝鳥
- 一、浅草水族館
- 一、浅草花屋敷の狒狒及び川獺
- 一、見附の取除け跡
- 一、丸の内の楠公の像
- 一、自働電話及び紅色郵便箱
- 一、ピヤホール
- 一、女剣舞及び洋式演劇
- 一、鰻茶袴の運動会▼

など数うるに暇が無い

1907 内田百閒 戀文・戀日記

明治40年

11/31 今晚、清さんを夢む、但、よく記憶せず

2/1 今晚、また清さんを夢みし、されどよく覺えず。

2/10 昨夜、醒めては寝足ること、二三度、其度毎に清さんを夢みたり。

清さんに會ひたきこと切也。明後日は行かん。

1909/4/10 石川啄木

Ikura ka no Kane no aru toki Yo wa nan no tamero koto naku, kano, Midara na Koe ni mitita, semai kitana! Mati ni itta. Yo wa Kyonen no Aki kara Ima made ni. oyoso 13-4kwai mo itta, sosite 10nin bakari no inbahu wo katta. Mitu. Masa, Kiyo, Mime. Tuyu. Hana. Aki-..... Nawo wasureta no mo aru. Yo no motometa no wa atatakai. yawarakai. massiro na Karada da: Karada mo Kokoro mo torokeru y6na Tanosimi da. Sikasi sorera no Onna wa. ya-ya Tosi no itta no mo. mada 16gurai no hon no Kodomo na no mo. dore datte nan-byaku nin. nan-zen nin no Otoko to neta no bakari da. Kao ni Tuya ga naku, Hada wa tumetaku arete, Otoko to yu mono ni wa narekitte iru. nan no Sigeki mo kanjinai. Waduka no Kane wo totte sono Inbu wo tyotto Otoko ni kasu dake da. Sore igwai ni nan no lmi mo nai. Obi wo tokude mo naku. . . sah. . . to itte. sono ma a neru: nan no Hadukasi ge mo naku Mata wo hirogeru. Tonari no Heya ni Hito ga i-yo to imai to sukosl mo kam6 tokoro ga nai. (Koko ga sikasi. omosiroi Karera no Irony dal) Nanzen nin ni kaklmawasareta sono Inbu ni wa. m 6Kmmku no Synsyuku say6ga naku-nattelru. yurundelru. Koko ni wa tada Halsetu say6no okonawareru bakari dai Karada mo Kokoro motorokeru y6na Tanoslmi wa Kusuri ni sltaku monai

1909/4/21 石川啄木

As I came out of the gate of the bathhouse, the expressful faced woman who solled(sic) me the soap yesterday said to me " Good morning " with something calm and favourable gesture.

The bath and the memories bring me some hot and young lightness. I am young, and, as last, the life is not so dark and so painful. The sun shines, and the moon is calm. If I do not send the money, or call up they (sic) to Tokyo, they---my mother and wife will take other manner to eat. I am young, and young, and young: and I have the pen, the brain, the eyes, the heart and the mind. That is all. All of all. If the inn-master take (sic) me out of this room, I will go everywhere---where are many inns and hotels in this capital. To-day, I have only one piece of 5 rin-dokwa: but What then ? Nonsense(sic)! There are many many, many writers in Tokyo. What is that to me ? There is nothing. They are writing with their fingers-bones and the G pen! That is all. Ah, the burning summer and the green-coloured struggle!

1912 エゴン・シーレ 獄中日記

私のまわりから総ての色が消えている。恐ろしいことだ
呪われた場所とは、このように色のないところに違いない

ノイレングバッハ刑務所 エゴン・シーレ

1912/4/16

絵や字を書くことの出来る紙、鉛筆、画筆、絵の具

私は再び絵を描くことに没頭出来る。

——私はへり下り、我を祈り、この絵の道具を求めて乞食のように哀願した。
もし他に方法がないなら、すすり泣いてもみせたらう

1912/4/19

独房の中の簡易ベッドを描いた。

オレンジがこの部屋のただ一つの輝く光

小さな色鮮やかな一点が

——いいようもない幸せを私に与えてくれる

1912/4/20

独房の中の廊下を描く。その隣にあるがらくたや、囚人が自分の房のせいそうに使う掃除道具も ——私は罰を受けているのではなく、浄化されているように感じる。

1912/4/21

素朴な椅子と水差しとの動きのある絵を描き、それに少しばかり色

私の二枚の色つきハンカチーフとの組み合わせ

1912/4/24

低い、おどおどした 大声の、切迫した、哀願の 絶望的な

冷えた手足を無感覚に伸ばし 震えながら 汗にまみれた

1912/4/26

全ての物体は物理的に最も確実に均衡を保つ

1912/4/27

ここで過ごすわけのわからぬ時間

ザンクト・ベルデン刑務所 エゴン・シーレ

1912/4/30

汽車に乗った

私は美しいものを見た 空を 雲を 飛ぶ鳥達を 遠くの木々を なだらかな屋根の静かな家々を

1912/5/1

トリエステを、その海を 夢見た

私は自分を舟になぞらえて描いた **アドリア海の水にゆらゆらと揺れているような カラフルで腹の膨らんだ船**

1912/5/

寝室の壁にピンでとめてあった一枚の絵——クルマウで描いた水彩画

私のまわりから全ての色が消えている

なぜ？ なぜ？ なぜ？ 分からない。私の問いにはいかなる答えも得られなかった。

1912/5

大人達は、自分がまだ子供の頃、どれほど墮落していたか、つまり性的衝動につき動かされていたかを忘れてしまったのだろうか。

恐るべき欲情がいかに自分の中で燃え上がり、自分を苦しめたかを忘れてしまったのだろうか。

1912/5/8 ウィーン

24日間、24日間、576時間！ この限りなく長い時間！

性を否定する者こそ汚らわしい

1916 エゴン・シーレ 戦中日記

- 3/19 夜、何度か門の前に立って、僕が十代の子供だった頃感嘆して見たときと同じように、つくづくと月を眺めた。
- 3/2 月曜 家にいる ぼくはひさしぶりにまたぐっすり邪魔されずに眠った。
- 3/21 火曜 午前中新しい絵についてあれこれ考えた <母>をじっくり見てみた、それから<浮遊>と二枚の<飲み込まれた人間>
- 4/1 土曜 三人の女がいる新しい絵を始めた。
- 4/2 日曜 一番上の横たわっている女を描いた
- 4/3 月曜 勤務なし 午後三人の女の絵で一番上の人物を描く」
- 4/4 火曜 かれらの国々はぼぐらの国なんかからよりもずっと思索する人々がいるのだ。だが、今日、戦争のことでなにを語ればいいのかというのだろう、だらだらと続く一時間が惜しい。
- 4/5 水曜 ぼくは朝から昼まで、栗の木のそばにたってそれがだんだん緑をおびてくるのを見ていた。
- 4/17 月曜 ぼくはキャンバスに、小さいのと大きいのと、義父を素描した。
- 4/18 火曜 勤務があった。ロシア人を一人スケッチした。
- 4/22 土曜 義父の肖像画を描いた。
- 4/23 日曜 ぼくたちの二重肖像に格子縞の上衣を描いた。一晩中雨が降った。
- 4/24 月曜 義父の肖像に暗色の背景を描いた。
- 6/8 いつもと同じ。
- 6/9 金曜 水車を描いた。黄・赤・青の雲から嵐となり雹が落ちてくるまで。
- 6/12 午前中いつもと同じ。午後、水車のそばにいる。
- 6/13 水車のそばで子供たちをスケッチ。
- 6/14 水曜 帰途ぼくは虹が一つ、それから遅れてひと続きの虹が現れてくるのを見た。
- 6/25 日曜 一日中。二時から四時まで風景を一枚スケッチした。
- 7/5-6-7 いつもと同じ。
- 7/10 魚釣り道具を買う。。
- 7/12 兵營の近くへ来た時、銃声が聞こえた。とっさに脱走だなと思った。叫び声、それから二発目の発射音…
- 7/14 廃墟のある風景を画く。
- 7/16 フェケテ少尉とヘルマン中尉をスケッチする。
- 7/23 ドーナウ湖畔のイプスまで足をのばした。精神病院の前に座って、出入りするさまざまな精神薄弱者を興味をもって見ていた。
- 8/3 ~5 同じ。
- 8/7 ~16

ニジンスキー 第一のノート

たっぷり昼食をたべた。半熟卵を二つにフライドポテトと豆を食べた。私は豆が好きだ。でも豆は乾いている。乾いた豆はきらいだ。なかに生命がない。スイスは病んでいる。全体が山の中にあるからだ。スイスの人間は乾いている。生命がないからだ。私の雇っている家政婦は乾いているので、感じない。彼女はよく考えに耽っている。長いことよそで働き、そこで干からびてしまったのだ。私はチューリッヒがきらいだ。乾いていて工場がたくさんあって、そのためにビジネスマンが大勢いるから。私は乾いた人間がきらいだ。だからビジネスマンはきらいだ。

1919/2/27 ニジンスキー 第二のノート

私はロシア人だ。ロシア語を話すから。娘はロシア語を話さない。戦争が私の生活をこんなふ

うにしたのだ。娘はロシア語の歌をうたう。私がロシアの歌をうたって聞かせたからだ。私はロシアの歌が好きだ。私はロシア語が好きだ。私はロシア的でないロシア人を大勢知っている。彼らは外国語を話す。私は知っている、ロシア人とはロシアを愛する人のことだ。私はロシアが好きだ。フランスが好きだ。イギリスが好きだ。アメリカが好きだ。スイスが好きだ。スペインが好きだ。イタリアが好きだ。日本が好きだ。オーストラリアが好きだ。中国が好きだ。アフリカが好きだ。トランスヴァールが好きだ。私は世界のすべての人を愛したい。だから私は神である。私はロシア人でもポーランドじんでもない。私は人間だ。外国人でも国際人でもない。私はロシアの大地を愛する。私はロシアに家を建てつもりだ。ポーランド人達は私を恨むだろう。私にはゴゴリが理解できる。彼はロシアを愛したから。私もまたロシアを愛する。ロシアは他の国よりも感じる。

1919/2/27 ニジンスキー 第三のノート

ドイツ人はツェッペリン社にたくさんのツェッペリンをちゅうもんした。彼らはツェッペリンから雛鳥が生まれるかと思ったが、生まれたのは死者たちだった。

一九二〇年六月二十日 ヴィトカッチ

5時40分、wは、掘き砕いて圍めたパン・ペイヨーテを二錠飲んだ。身体に軽やかさと寒気を感じ始め、胃の具合が悪くなるような気がしてくる。

6時一欠伸と悪感。脈拍 88。6時15分、気分が楽になり、神経がすっかり鎮静してくる。wは、ペイヨーテをもう二錠飲み、トマトと卵を倉べる。そして、ミルクを一滴たらしたコーヒーを小さなカップで飲む。

6時25分、コカインを少量やった後のような、やや異常な感覚に陥る。脈拍 80。三枚の肖像画を描いた後の疲労感がすっかり消える。Wは落ち着いた足どりで部屋のなかを歩き廻る q そして、窓の日除けをしっかりと閉める。

6時40分、脈拍 72 - 身体が軽くなった感じがするが、意識がややもうろうとして、頭が幾分くらくらする。何もせずに凝っとしていることが我慢できなくなる。退屈して、煙草が吸いたくなる。

6時50分、wは三回目の錠剤を飲む - 飛行機が飛んでいるのを食い入るような眼で見つめる - それから、また日除けを下ろすと、ベットに横になる。瞳孔は正常。脈拍 84。不思議な感覚が起こる。幻覚(グビジョン)を待っているが何も現れてこない。とうとう退屈して煙草を吸ってみるが、最後まで吸うことができない。

7時20分、ベットから起き上がり、最後の錠剤を飲み、再び寝る。感覚が薄れ、気力がなえていく感じがする。三十分間寝た後で、wは起き上がるが、不快感を覚えた。脈拍がやや弱くなり、瞳孔が幾分拡大し、声が変わってくる。コーヒーを頼み、凝っとな横になっている。起き上がろうとすると吐き気がする。

8時30分、夜の闇に明かるく輝くフィラメントの渦巻きが見えてくる。その後に、動物の幽霊や海の怪物や子供の顔や髭を生やした男が現われ始めるが、彼はまだそれを幻覚とは考えていない。むしろ、眠入る前に眼に浮かぶ誇張された影像と思っている。黒色のヴェルヴェットの帽子をかぶった男が、イタリア式バルコニーから身をのりだして、群衆に語りかけている。たしかに想像力が昂揚してくるのが感じられる。だが、依然として異常な状態は起こってこない。前よりも気分が良くなる。しかし起き上がると、一瞬百眩がして気分が悪くなり、《不可思議な》感覚に陥る。それと同時に、筋肉に異様な感覚が走る。

9時、虹色が見えてくる。だが、それはまだ幻覚とはいえない。

9時30分 - 鮮明に浮き彫りをほどこされたさまざまな彫刻と微小な顔が現われてくる。そして《不気味な》感覚を味わうが、気分は良好。虹の帯が見えてくるが、まだ完全ではない - - その主色は濁った赤色と淡黄色。現実を忘れてなくなる。巨大な建物が現われてくる。樹木が駝鳥に変態する。死体の脳髓と膿瘍から、閃光の塊りが飛び散る。そのほとんどが気持のわるい幽霊である。天井の赤い背景から、角の生えた四足獣が姿を現わす。傷をおった巨大な胃袋 - - その内側が海底の珊瑚に変わる。海の怪物たちの戦い。ソクウロスキ先生が頭足類に変態す

る。空間の《歪み》。地球の断面図。驚くほど豊かな植物の生命。10 時、倦怠感が消えない。意識がもうろうとしてくる。無感覚な物体の戦い。一連の小部屋が地下のサーカス小屋に変わる。奇形の四足獣が何匹か現われてくる。そして、面白い人々の一団が箱のなかで蠢いている。箱が変態する（しかし何に?）。視覚が感じとる二つの層——その影像は白色と黒色。七色の虹は分離したままである。陸と海の怪物と醜悪な人間の顔が幻覚を支配する。蛇とキリン、それからフラミンゴの鼻をつけた羊。この羊からコブラが這い出てくる。アザラシの尻尾をつけた二重冠毛のカムリカイツブリー——口部が裂け散り、火山が魚に変わる。アフリカの幻影。11 時、食欲旺盛。だが同時に、極度の倦怠感。二、三個のトマトを食べるのに三十分以上もかかる。怪物を背景にして、水先案内人の貴色い帽子が現われてくる。それから制服が、そしてポーレン大佐の顔が黄色い光に照し出されて現われてくる。野生林のなかから混沌とした渦巻きが起こり、美しい海岸が前面に現われ、海岸線にそって黒人が自転車にのって通り、短く髭を生やした男に変身する。そして、黒人が運んでいたおもちゃがメキシコの彫刻に変わり、wの方を見つめながら梯子を登っていく。一連の女性の生殖器——そこから内臓と活潑な虫と宙返りした緑色の胎児が飛び出してくる。

1928/3 不潔恐怖 患者

昨年四月頃から、火事恐怖を起し、例へば畢枝で、紙片等を見れば、之に火がつくのではないかと心配になり、又道で、煙草の吸殻を見ても之から火事起るのではないかと、之を手にとって、調べなければ東がすまない。六月頃から、火事の事は、少なくなり、窃盗恐怖を起すやうになった。店の物・千し物等を見れば、之を盗むのではないかと気になり、其昆を去る事が出来ず、又自分の鉛筆が、人の物でもあるかのやうに疑ひ、このやうな強迫親念も、次第に慶化して、九月頃には道で何かの調子で人に負傷させるやうな心配が起つた。五、六月頃から、食物を見れば、毒ではないかと疑ひ、次には新聞の記事を見て、自分の事が出されたのではないかと疑ひ、又新聞の宮員を見るも、之を傷つけるのではないかと気になり、次には新聞廣告等で、淋病等の車を見れば、自分がそれに俸染するやうな気がして手を洗はなければ棄がすまらず、電柱の廣告を見る事が恐ろしくて、頭を畢げる事が出来なくて、下ばかり見て歩いている……

1931 1/5 ジュリアン・グリーン

ニュースの映画の中で、平和と戦争についてのムッソリーニの演説。平板で冷たい、内容空疎な演説。人殺しの板前といった顔をして、彼はイタリアの平和に対する願望をわれわれに語る……彼がファシズムの政体について話すとき、彼の唇は皺がより、口の両端が左右に大きく離れる。悪い印象。彼の演説は、そのうえ、恐慌をふりまくのに最も適している。

1932/11/19 ジュリアン・グリーン

右も、左も、否。

1931 森田正馬

- 23 歳 大学生・狂犬病恐怖 S6/8 入院
- 28 歳 大学生・対人恐怖 S6/10 入院
- 26 歳 小学校教員・対人恐怖 S5/10 入院
- 24 歳 酒商(高等小学卒業)・赤面恐怖 S6/6 入院
- 28 歳 高等女学校教員・不安発作 S5/8 入院
- 24 歳 商人(中学卒)・対人恐怖 S6/11 入院

第 54 日・人前は恥ずかしいおいう事を、冬は寒い・という事に例えて、説明された。寒いからといって、いつも炬燵に入って居れば、一寸出ても、風をひくようになる。

- 35 歳 電気職工(高等小学卒業)・心臓麻痺恐怖 発病以来 1年2ヶ月、以来休職。S4/10/6
入院、26日間・全治退院 3、4時間も心臓が石のように、冷たく硬化するかと思われる・あの苦しい発作。不治・死・貧・家庭の破滅。
- 32 歳 呉服商(中学卒業)・胃アトニー反芻癖 S7/10/17 入院
私には、15、6歳頃から、反芻癖があって、大食又は茶など、多量に飲んだ時、食物が口の中へ返る事があって困りますが
- 26 歳 官吏(中学卒業)・読書恐怖 不眠症 S8/1/27 入院
第30日 『神経質の天国』を読む。一気に、60頁ほど読んだ。自分は読書恐怖だったのである。それに小さい活字ほど恐ろしかった自分である。丸で羽化素のやうである。
- 25 歳 法科大学生・不道德恐怖 S7/9/6 入院
一番苦しいのは、不正恐怖です。例えばまだ余り年月のたたない頃、ある時、他家で、畳の上にあったマッチの棒を、僕が取りはしいなかと恐ろしくなり、その苦しさにかねて、終にそのマッチの棒を取って来て、弟に、今これをあそこから取って来たといつて
- 33 歳 自動車業(高等小学校)・嫉妬恐怖 S8/7 入院
ある時妻が、夢に或男と手を取って、散歩したという事を聞いて、始めて嫉妬という事を感じ、枕にて妻を殴打し、頭部に一寸位の傷をおはした その後離婚。第二の妻は、妻には別に、何も不都合な事はなかったけれども、第一の妻に裏切られた事を恐怖する余り、結婚直後から、既に自家の使用人又は友人等に対して、嫉妬を感じ、次第に甚しき暴行をするやうになり、妻は苦しみに堪へないで、自殺の目的で、海岸に行き、警察の保護を受けた 結局無理やりに離婚した。第3会の妻も、第二回と同様に、嫉妬のため、それ以上に苦しめて離婚した。第四回・現在の妻は、結婚前から、互いに理解あり、先方から進んできたのであるから、嫉妬するような事はなかろうと思ふて結婚した。それはその後次第に前と同様になり、甲乙丙丁、それから、それと嫉妬の対手を一人宛考へて居て、妻に対して、暴行するようになった。また第三回結婚から、早漏があって、尚更嫉妬に対する恐怖が甚だしくなつて来た
第二日 先生のお話、「欲を捨てては、この病氣は治らぬ」という事は、特に私の胸にこたへた。
- 25 歳 小学校教員・直感力減退恐怖 S8/5/23
- 27 歳 農業(中学卒業)主症朦朧感 S10/5 入院
- 28 歳 会社員・縁起恐怖
8歳頃から、死の恐怖に捉はれた事がある。又既に小児期から、巴御前・チャンダーク・毒婦等の絵を見る時に、性欲を起こして、自ら変態心理でないかと恐れた事がある。またこれも小児期から、十三・四・十六の数を嫌い、時計の十三分の時には寝る事が出来ない等の事があつた。現在の強迫観念は、この数字や金曜日の縁起を恐れる事が多い。昭和12年5月17日・入院 5月17日 「宿から先生の處まで、電車の停留所が十三あると聞いて、イヤに思ったが、しかし他の場所から乗ったのでそれはやや安心した。

1932/7/23 ミシェル・レリス

僕は憑依者たちを研究するより憑かれたい、<女ザール>の詳細を科学的に知るよりは、<女ザール>を身体で知りたいのだ。

7/26

奴隷の購入と解放。商人たちが女の妊娠とすでに生まれている子の三、四歳という年齢を有利に使ったので、二百七十タールもかかる。

7/30

母親は二十歳を余り超えていないようだった。七歳の時に両親の手から盗まれ、グリオールが6番目の主人だとのこと。つまり一人の主人のもとに平均して二年少しずついたことになる。ラス・ハイラーの所有物だったので、三ヶ月ほど前、彼の財産が差し押さえられた折、いったん解放された。知り合いの女性が、身を守ってやると称して、両親の家へ連れ戻ってくるといふ一人の男に彼女を託した。そしてこの男が彼女を、メチャの首長であるグラズマチのタッ

ファラに売り、こちらはこちらで、ネガドラス・バレーに売り、彼からグリオールが勝ったというわけである。

7/28

蜜蜂入りの、インジェラと呼ばれるせんべい、煮たサラダ、牛乳。全体の空気は、最初かなり陰気だ。老婆は、彼女にとりつく三人の偉大な精霊のうちの一人の化身となって、とりとめのない話をする。しかし彼女は、いつもヨーロッパ人にへつらう。

8/31

午前中、エマワイシュから手紙。毛布を一枚プレゼントしてくれないかと。これほど貧しい人々にとって、ヨーロッパ人がどれほどとほうもない富の権化と見えることか

32/9/1

ワダジェを襲った連中が、公式に謝罪しにやってきた。シフタづらの3人の男……。二つの記憶。一つは最近のエマワイシュの詩についてのもの。

その首、胸、腰を見つめられたら、

彼女はこっそり笑って相手を殺す。彼女を女と思うなかれ。

9/2

昨晚、気晴らしにカービン銃の射撃ヲした。

1932/5 サンテグジュペリ

ぼくは、ぼく自信の言語を、世界を把握するのにより適した手段として提起しうるにすぎない。

人はもっとも便利な言語を信じる

ぼくは言葉によって世界を所有する

万事はまるで、……のように行われる。もし万事がまるで……のように行われるのなら、これもまたこうなるはずのものだ

サンテグ・ジュペリ

ぼくは一枚のカードの上に無数の文字を、一つ一つ書き込んでノートする。

帰宅したぼくは、これらの文字がカードの枠のなかで、解読不可能なテキストを構成していることを確認する。すでにぼくは、ぼくの部屋に侵入したらしい男の行為を垣間見ている。

<わが愛する人よ、ぼくはあなたを愛している>という言葉は、すでにぼくは大いに困惑させるが、<きみは1900年6月29日に生まれた>という言葉のほうが、いっそう僕を混乱させる。

サンテグ・ジュペリ

概念、ぼくはぼくの内部にそれが生まれるのを待ちさえすればよい。<概念を探しにいく>いかなる手段もぼくにはない。

ぼくはまず次のようなところから出発する。<われわれは完全に間違っていた……> 決して<少し>というようなことはない

サンテグ・ジュペリ

たとえ、ぼくが月を知っているとしても、月のいくつかの<状態>や普遍的宇宙に於けるいくつかの<断面>のみである。_ぼくは月の速度を、きわめて近いいくつかの状態との差異によって定義する。

時間は不連続の世界を連続させるセメントであらう。

科学における概念とは、方向である。その方向こそ創造的行為だ。それは風景の中に<意味>を導入することである。

1933 小津安二郎

- 2/4 東京の女撮影完了
 2/5 カッチング
 2/8 東京の女 検閲カットなし。清水、斉藤と銀座に出て不二アイス、東京屋に寄りせんびきやにてポンカンを買帰る。
 2/9 東京の女 封切り
 2/11 橋本泰太郎上京 貴志男 与三と停車場に行く 不二アイス→都下鉄→エノケン→中清→帝国館→松屋スポーツランド→一銭蒸気→深川 ずいぶん歩き回って疲れた
 2/13 資生堂の二階でライスカレーを食べて内田岐三雄に会う
 2/14 所長より東京の女原作料 70 円 次長より慰労金 50 円 写真を上げてその写真が市内の第一封切館にかかっている間はこの商売の何とはなしの心易さだ。

1933 小津安二郎

- 6/7 まことに細雨 一日家で昼寝 日暮れ方風呂に入って久しぶりで雑談する
 6/9 興行価値がどうしてこうしてと言っているあいだは千変一律のもので決していいものはできっこなしだ 儲けることしか考えられない人間は可哀相だ
 6/10 俺はどういうものか至って気が早い 諦めがよすぎて困ることがある
 諦らめきれないものを思い切ってあきらめてサバサバした気持ちで雨の音をきいた
 いつかのことがひよつくり、この頃になつてなつかしまれることがある
 7/3 湯に入って 紅茶を飲んでいるところに久米さん来る 射的をやって 大弓をやって
 晩に酒をのんで池忠と 未完成の美と粗雑なる完成品とを論じていささか酩酊のうた
 たね
 7/4 レビューの水の江滝子ワンピースの上にレインコートをはっかけてサクランボウを雨に濡れて買っている
 7/18 A FAREWELL TO ARMS 帝劇で見る、くだらない代物

-

1933/12 ヘディン

いたるところに黒い亡霊や妖怪が腕や脚をねじ曲げて立っているの見える。亡霊は両手を突き出して、私たちをこなごなに引き裂こうとする。後から忍び足の音が聞こえて、それが次第に近づいてくる。思わず足を速めて駆け出すと、砂塵の構の中からおぼろげな輪郭で浮び出てくる怪物の腕のまっただ中に飛びこんでしまう。静かな夜には、すすり泣くような謎めいた音が耳を打つ—死んだ悪人たちの成仏できぬ亡霊であろうか？
 それとも狼や、山猫の声にすぎないのだろうか

私の生涯の恋人は、中央アジアである
 あたり一帯、一滴の水もない
 ダムビン・ラマの盗賊の砦 1934/1
 人ひとりの足跡も見たことはなかった

1933 ハイナーミュラー

私は小さな専用の部屋を持っていてベッドで寝ていた。朝ずいぶん早く 5 時頃、すぐそばで話声どドタバタという物音、彼らは、本を床に投げ捨て、左翼文学の蔵書を一扫していた。私は、鍵穴から父が殴られるのを見ていた。彼らは、SAのユニホームを着ていて、母がその横に立っていた。私はベッドに戻り寝ていた。すると彼らが、戸口に立った。薄目をあけると、二人のちょっと手ごわそうな突撃隊員の影が、そして二人の間に、小さく父のの影が見えた。父が私の名前を呼んだ時も、寝たふりをしていた。

1935/10/15 寺田寅彦

教科書の中に載せてある色々な顕微鏡写真の標本には、しばしば死刑囚の身体のいろいろな部分から取ったものがある。

この点だけから見ると、一生何一つ世間のために貢献することなしに終る紳士淑女達よりも、こういう死刑囚の方がはるかに大きな功績を世界人類の知識の上に避したことになる（昭和十年十月十四日）

1937/2/7 古川ロッパ

帰りの円タクの運転手が、近頃の浅草はまるで田舎者ばかりになったと言う。丸の内に典行街が出未で浅草の客が取られてしまったのだ。その上、江東楽天地が来年出来れば、又そづちへ取られよう、浅草は今後、奥山となる、**即ち、エログロの見世物**が栄える時代になるだろう。

1939 ハイナーミュラー

その後、私たちは、強制収容所にいる父を訪ねた。奇妙に何も無い風景で、収容所は高原の上にあった。父はやせこけて、小さく見えた。私は、自分の絵やスケッチ、煙草の箱の絵など見せた。この訪問のあと、私がベッドで「**柵を飛び越えて来てよ**」と寝言を言ったら母が話してくれた。

1939/1/13 (金) 小津

兵隊八十三時から十六時まで半時間一円、下士十七時から十九時まで三十分一円五十銭一時間二円。兵は一時間一円五十銭。高橋伍長試みに出かける。

1939/4/3 (月) 小津

弾に対しての恐怖八殆ど持たなかつた。身近く追撃が裂け小銃弾が流れても何の恐怖もなかつた。**欠伸をする。その瞬間に頭を弾が射ぬく。**そのあとのことハしらない。どこか腹の底(対)に俺には絶体に弾ハ当たらないと云ふ自信に近いものが確にあつた。何故だと云はれ、バ困る。

1939/4/3 (月) 小津

馬の顔を、表情をしみじみ見た。目と目との間の、鼻面から鼻穴にかけての、大まかな間のぬけた顔貌がとても可愛い、ものに思はれる。馬の目も確に物を云ふ。泥んこになつて道傍にのたれて置き去りにされた馬がしばらくは四肢で力なくあがいてゐるが、やがて静に頭を下げて死んで行く。こんな光景も一度ならず見た。〈ほ入とにつらい時ハ馬も涙をこぼしますよ〉と軌馬の輔重の兵隊が云つた。黙々と草を喰んでびつしより汗バんだ馬が横目で見てゐる。鞍ずれで背中が赤くむけ、瘦せて肋骨が数へられる。人間に似た、もつとむき出しの感情がそこに見られて憐爛の情がとても湧く。

1939/4/4 (火) 小津

こんなことがあつた。安義から奉新に向ふ途中の靖安に通ずる三叉路の所で、残敵と土民が道路上に死んでゐた。その土民の傍に漸く誕生が来たかと思はれる程の赤坊が無心に乾パンの袋を弄んで遊んでゐた。脛から血が頬に流れて凝結して、散々泣いて泣きやんで けろりとした顔だつた。傍の藍衣の土民が果して父親か何か知る由もないが、誰の目にも傷ましく映つて**赤坊が泣き出さない前に通り過ぎたい**気持で足を早めた。追撃が急で誰も赤坊にハマつてゐられなかつた。四列の行軍ハこの道路上の赤坊に堰かれて左右に分れた。巻脚絆に大きな靴、踏ま

れればひとたまりもない赤坊が行軍の流れの中で無心に戯れてゐた。菜の花を背景に巧まず映画的な構図になつてゐた。だがこれハあまりに映画的でありすぎて、これにレンズをむけるこ

とのあからさまな作意が、《Hears of the World》の足の悪い父親と娘の件を思はせた。だがこれハ作意でハない。現実のいたいたしい風景で、それだけに心博れた。

1939 8/25 湯川秀樹

八月二十五日金（ベルリン）午前七時、エリクセン主婦、寝ている所へ一通の書片持参し来る。

「ただ今日日本人会より電話あり、風雲急なるゆえ、万一の場合を慮ってハンブルグに入港の汽船靖国丸に避難するよう勧告あり、さし当り、本日午後六時荷物をトラックにてハンブルグ行発送さる由、遠城寺」

とあり。

日本人会に至り荷物を託す。大分心が落ち着いたので散髪、スニーカーを買ひ、東洋軒にて夕会。午後八時頃帰つて見ると渡部氏ハンブルグより帰つておられ、情勢はなほだ急迫せるゆえ、今夜出発するとのこと。直ちに渡部氏と共に準備を調べ、エリクセンへの支払を済ませ、立出づ。主婦並びに見送りに出て来た女中のおろおろせる様を見てまことに傷心に堪えなかつた。

1939 9/4 月 晴 やや涼し 湯川秀樹

九月四日 今朝英国汽船 Victoria が撃沈された。London が今朝五時空襲された等の噂あり。だんだん悲壮な気持になる。写真撮影も厳禁、見つかると思ふと拿捕される虞あり。船が動いても、当分は、位置がわかるといけなないので、電報を打てない由、記念写真撮影は食堂にて。午後たった今ベルリンから来られた増本氏の最近情勢についての話あり。ドイツ人は九月一日になつても、100%戦争なしと信じていた由、しかし、い残つた邦人は Gas Mask の供給を受け、郊外に避難することになった。

London は早くから空襲に対する備をし、食糧の買溜なども早くから行ひ時局が切迫してもかえつて平穩の由、子供らは皆郊外へ避難した由。最後に平田書記官より挨拶、書記官の発声にて天皇陛下万歳を三唱、

水上の景色はすこぶる穏やかであるが、船中の人は清水艦の危険を語り合う。これで無事に日本に帰れば、適度のスリルを味わい得たものと喜び得るが、万一の事を思えば何人も心平かではないであろう。まして子供を連れた婦人連のことを思えば、まことに同情に堪えぬ。午後五時一同救命具をつけて甲板に集まる。夕方より大分寒くなつて来たので毛のシャツ、股引を出す。雨が降り出し、風あり船少しく揺れる。

1939 9/ 火 晴（ニューヨーク） 湯川

9 九月十九日 七時起床、九時過ぎ、「大和」に行つて朝食、郵船ニューヨーク支店にて鎌倉丸を予約する。渡部、遠城寺両氏の分も頼む。次に三井銀行に行き、為替ニボンド - 三、七五ドルと四ドル)の差額三七・五ドルを受取る。昼食はH目←○日目ユg再ドニ○亡腕○に運沼宏君（機械試験所技輔、兼商工技師）と◇共に○○ド画自び臣画【】目巨く①希声←kの化学教室に行きHV日○h - 甲H1○1【】日Qkに会い、之ト（とZH画および○目伯と○目を頂①b画轟←①する実験を見せてもらう。前著は要するにZ三ニ船+ZH甲H、↓Zト轟轟+Z二甲Hトの反応を逆道さすために①目8←自く①再日①伊の大きなアンモニウムの傾○三←臣○目にアンモニア項農を通すのである。後者は甲目QUZ+○戸構 - ↓由自Q旧Z+○H○ - の反応によって○目りZ - 傾面胸を作る。実験室中にZ目柳No次へ?画○来へを含んだZ由bH勘画自b)①の数多くがごろごろしている。○H伊の方も同様である。次にU仁自土目頭の所へ行って○k○ド○←日gを見る。ト朝○B自○日○画目P①1∨XH○8く(句)のb日○←gと巾①の日○画←←欧○目でできた目①官言○目を便つて仁)、画目臣亡目の画腕期臣○目をやっている。自○崩○←日○目を実験室で作れぬかと質問するので自ひひ申gの時にでぎてもよいとのべる。また巨腕腕臣○目b日○○宮○←をええばどうかなど答える。これは後でよく考えて見ると間違であつた。次にU日・申自・○・巾①k①日に会つて目①宮←号gに対する司?三の合金も①日目飯目○kのごときものの○日○腕腕伊①○

←自○目が熱処理でかわることを験べているU木村一治君（蓮沼君と同級）の実験と固様である由。Uト・ミ臣ド伊g句が間○日自巨の指導で8腕置巨o轟kの実験をやっている。

1941/12/10 グレアム。グリーン 西アフリカ輸送船上

左舷は特にビリビリする冷たさ。鳥が一羽飛んでいるのさえヘリコプターのように見える。機関銃の側にいると空ばかり気にする——デッキの上の高いところに腰掛けていると、鉄線が風になる音が教会の中から聞こえてくる合唱のように聞こえる。

12/11 グレアム。グリーン 西アフリカ輸送船上

無人島へ持ってゆく本

ド・モーパッサン短編集／旧約聖書（ワールド・クラシック版）／新訳聖書および使徒行伝（ワールド・クラシック版）／エドモンド・ゴス「父と子」／アンブラー「ディミトリオスの棺」／ウォータトン「南アメリカ放浪記」／ハーバート・リイド「ナップ・サック」／オックスフォード版17世紀詩集／リルケ詩選／ワーズワース詩選／ゴールドン・トレジャリ／ブロードウェイ版イギリス詞華集／ペンギン版ブラウニング詩選／ブラックウェル版 一巻本シェイクスピア／TFボウイス「心優しい一隅／エイルマーモード「トルストイ伝」／ギヤスケル夫人「北と南」／ハイドン「自伝」

12/30 西アフリカ輸送船上

黒人の水夫は給与の一部を米で受け取る——毎日のタバコかんに何杯ぶんかずつ。かれらは一つの尺度としてタバコかんでくれと要求するが、かんの底を親指で少し押しさえすれば各かんについて少量ずつながら配給の米の量を減らされることには気がついていない。

1942/1/3 グレアム・グリーン 西アフリカ輸送船上

実に奇妙で詩的で勇気づけられるものを感じる。混沌の世界をくぐりぬけてふたたび人生にみずから刻印する一つの形態に出会った気持ち。まるで自分が夢みていた土地を見ているようだ。陸地から野暑い甘い匂いさえも・・・ある養分に飢えた緑樹お赤土、あのブウゲンヴィリア、クルー族の集落の小屋からでてくる煙などのまじった匂いだろうか、それとも植樹のために密林のなかで土地をひらくために焼いている費のためだろうか？その臭いさえもなつかしかったか。人間の心臓の形をした空白の、未開発の大陸

1942/6/12 アンネ

あなたになら、これまでだれにも話せなかったことを、すっかりうち明けられそうです。どうかわたしのために、大きな心の支えと慰めになって下さいますように。

1943/6/8 ダンロップ

現在の私たちの医療の主要問題は以下の点である。

- 一、マラリア。
- 二、病勢の盛んな敗血性の炎症と皮膚感染。これらが半飢餓状態とある程度は関係があることは明白である。
- 三、ペラグラと脚気。
- 四、赤痢と下痢。
- 五、足の問題。恐るべき気候と、長靴がないこと。
- 六、ジフテリアが、予防の血清がないため発生する。

病人の整列は疲労を深める苦悶だ。見下げ果てた悪魔たちによって、午後十一時三十分まで続

く。真っ暗闇の中、ジャングルの道をのろのろと歩くのである。今晚オカダは狼のごとく吐え、さらに十名を外へ出した。仕事はおろか、ほとんど立つことさえできない者がもうすでに五十名外に出ているのに。本当に許し難いことだ。

1943/7/8 古川ロッパ

昨日寺視庁の検問が見物に來り。「芋と官軍」の演出について大いに怒り、今朝菊田等呼び出され、今日からお化けは一切引込めろと言われた。畜生、木っ葉役人の、それも個人の手で此ういう命令など出していいものか！ **ロッパというのは俺の名だ**。それを片仮名で書いちやあ何故悪い？ もう少しで警視庁へのり込んであげてやろうかと思った。このままじゃあ、然し、胸がおさまらない。

1943/7/15 ダンロップ

コレラ患者、現在三十六名。軽症十二名、確実な者二十四名（今日、新たに五名）。

今夜はみな一晩中働かねばならない。理由は神のみぞ知る。たぶんこれ以上ない、意味ありげな意志表示なのだ。最後の橋はほとんど完成しており、後は鉄道が敷かれるだけなのであろう。今夜は休みなしの運送の過酷な作業の六十二日目である。作業場まではほとんどが徒歩。

現在八名が塩類の静脈注射を受けている。セットの器具は一交代で回している。私の聴診器は管材の不足のため、投与用の粗末な器具になってしまった。ビール瓶のてっぺんを切断し、ゴム管そして短い針に接続し、カニューレとなる。どうしてもすべてが恐ろしく粗雑である。炊事場の塩もそうだし、蒸留水にも時々かなり沈澱物がある。無菌法も相当雑だ。コレラとの戦いも、私がこれまで経験してきたもっともおぞましい戦いである。傷病兵治療所の看護兵数名が今、病気でやられている。

7/19

含塩物の点滴は、瘧疾を静めてはくれるが、片腕を伸ばしたままじっとさせておかねばならないので、特別な惨めさがある。痛ましい収縮、脱水症状、土色のチアノーゼ、虫の鳴き入るような擦れ声、非常に苦しい痙攣、腹部の痛み、速い呼吸、氷のように冷たい息、ほとんつわごとど脈博のないだらっとした手足、定期的に襲う不安と譫言。看っていて心をかき乱されるほどの不安をいだかせるのが、コレラの眠りである。瞼を開き、眼を上向きにして、横たわる、あるいは眠るのである。そのため瞼の間から真珠のように白いものがこちらを凝視している。初期段階ではほとんど全員が割れんばかりの耳鳴りの苦しみを訴つえる。夜のうちに四名が死亡。もう一人のフォン・スタイリッツは譫言をいう精神混乱状態に入った。

1944/5/27 E.E. ダンロップ

昨夜、血液提供者になる8名の血液顕微鏡検査をしたところ、ある混乱が生じた。6名に寄生虫病？ ミクロフィラリアが含まれていた。多くの者をこの寄生虫が悩ましていると考えると憂鬱になる。私も自分の血液を調べてみたが、寄生虫のいることがわかる。翌日私は血液を薄めるために使用した塩類溶液を調べた。それが円虫で汚染されていたのだ。

1944・7/15 土曜日 アンネ

わたしにはすくなくからぬ勇気があります。いつも、自分はとても強い人間で、どんなことにも堪えられると思っていますし、大きな自自と、すばらしい若さも感じます！ はじめてこれに気がついたときは、すっきりうれしくなりました。

つまり、わたしにとっては、トップに立とうとして闘うことが、なによりだいじだということを、いまだに理解していないのです。「おまえの年ごろにはありがちなことだ」とか、「ほがの女の子は」とか、「そのうちそういう悩みはしぜんに解消する」などといった、通りいっぺんの台詞は、聞きたくありません。そんじょそこらにいる女の子といっしょくたにせず、彼女なりの美点を持ったアンネとして扱ってほしいのです

1944・7/18 佐々木光子

昭和19年 7月18日 火曜

起床6時。ボンボンボンボンと五つなった。急いでラジオをかけた。そしたらわたしたちにとってまたも悲しいニュース。「セイコちゃんコマッタジャ」といったので私が「何故」と言ったら、「したって、サイバントウの人全部死んだと。そうすると日本さ来る」と言って泣きそうになっていた。小さいセイコちゃんがラジオを聞き取れるかと思ったら、私はびっくりした。「セイコちゃん、もし敵の飛行機が飛んできたらどうする」と言ったら「その時急いで防空壕さ入る」などと言った、とてもかわいいセイコちゃんだ。

11月11日 佐々木

日曜日 雨曇り

なんてすごい風であろうか。母や兄はきょうちゃんの向かいに盛岡駅まで行った。

11月12日 月曜 曇り

父と二人なのでとても淋しい。山から来た男(とても面白い) 急にラジオが止まった。またも激しい風が吹いて、家の電気が消えてしまった。家の中は急に真っ暗になってしまった。父は神様の前でお勤めをしていたのに、私はあまり恐ろしくなり、思わず「父さん」と叫んでしまった。外はまだ激しい風だ。

1944/6～高松宮

六月二十二日 御所(御都合伺ヒ参ル。「サイパン」ヲ失フコトノ重大ニ関シ一言申シアグ。アトツケタリニ皇族ヲ何ニテ御相談相手ニナサル御思召ナキヤ向ヒシ所、政治ニハ責任アツカカラ出来ヌ、統帥ノ方モ責任アルベシ、結局御たよりになる者なしトノコトデセウカ、「ソレハ語弊アリ」、相変ラズニテ落胆ス)。

六月二十四日 曇 食后、談ガ「サ」ノコトニナリ、朝香様八奪回作戦ヲ強行セネバアト目算ナシ。東久道官八成算ナキ奪回ハヤラヌ、アト何ントカナルカモ知レヌ。午後、手紙ヲカキ、御苦心遊バスベキ時ト恩フト書イタ。

六月二十六日 元師会議上奏御決定ノコトナレバビツクリ返ヘスコトナシトノ御話アリ、ヒツクリカヘスニアラズ、「サ」確保ト云ヒ実行セザルニ問題アリ云々カラ、ヒッコイトコトデアッタ)

六月二十七日 伏見宮ヨリ来テ具レトノコトニテ行ク。内閣ニテ倒閣運動トシテ注意シテキルカラ、渦中ニマカレヌタメ、一切コノコトニフレヌコト、ストノお話ナリキ。「テロ」ノ恐怖始マル。

七月十六(日) 晴 鈴木侍従長曰く 私ガコナイダ何ニヲ申シ上ゲタカシラヌガ、大分アトデ御興奮ニナツテキタ。御性質モアリ重大ナコトヲ申シ上ゲタトキ御キ、ニナル様、余マ?リ小サナコトデ御耳ヲフサグ様ニシムケヌガヨイダラウト。

七月二十九日 島田技少佐 総参謀長ヲオキ統帥ヲ強化シテ私ニソレニナレト云フ。皇族ガナルコトマデハ伺意ダガ、私ト云フ点ハ伺意出来ヌト云ツテオク。 _

八月九日(水) 晴 北白川ノおば様イラシヤル。事局ニ御心配ニテ何ントカ皇族ガセネバナラヌガ案ナキヤム々。御所ニ上ツテ、オ上ニコノ時局重大ナ時、オ上モホントニ御自身デナサル思召大切トームフ様ナコト申上ゲシニ、オ上ハ「ドウモナラヌノダ」トテ、例ノ様ナ少シ工作スルトマツク云ツタト云フオ話アリシト。ナサケナイ事ダ、ドウシテ平時トコノ危機トノ区別ガオツケニナレヌノカ。

八月十一日 オ上ノ御興奮モコマッタモノナリ。困ツタ位デコノ重大時局ヲドウシタラヨイカ、ホト^ホト 安キ時モナキ思ヒナリ。ドウシタラヨイノダラウ。

九月十六日(土) 雨時セ止ム。 高木前教育局長来談 私ハソソナ玉碎ナンテ出来ヌコトヲ云ツテモ駄目ナリ、七生報國ノ生キテ護國ノ任ヲハタス心ガ国民ニナクテハナウヌ。死ヌナンテ生ヤサシイ時ハスデニ通リスギテル。悠久ナ日本ヲ守ルタメニ、和平モ考ヘテヨイ、考ヘ

ネバナラス、ソシテ決戦ノ連続ヲヤルベキナリ、話ス)。

1944/12/11 神谷美恵子

どうせ完成するということはないのだから、ただ完成に向かって一生懸命歩んでいた、ということだけでいいと思う。死ぬからと言って特別に取り繕う必要はない。あしりのまま天地に育まれたまま天地にかえって行けばいいと思う。いつ手折られても野の草は美しい筈だ。

1945/2/27 ケストナー

わたしたちはまた数日Lで暮らしている。きのうはシェーネベルク区と都心がひどく爆撃された。特にアレクサンダー広場、ゼー街、ミュラー街、シュレーゲン駅などがLに避難民を収容するよう、命令される。土地の人たちは反対する。住民の忍耐は尽きかけているようだ。列車やバスの中でも、手足を切断されている障害者に対してさえ、しかるべき心づがいをもうしなくなっている。見せしめのおどかしはもはや役に立たない。人はそんなものにあきあきしている。不安は方向を変えた。せきとめられた、これ以上せきとめられない不満が、弱い人たちをおそう。

ケストナー

最初のユキノハナをつんだ。帰って来たムクドリがそうぞうしい群れをなして、わたしたちの頭上を飛んだ。春と没落が地上にと同様に空にもある。自然と歴史は、意見を異にしており、わたしたちの目の前で争っている。いつか歴史の春を体験することができたら、どんなにいいことだろう一だが、わたしの暦には春はのっていない。歴史の季節は幾世紀も続く。わたしたちの世代は、「近代の十一月」のうちに生き、そして死ぬ。

1945/3/1 ケストナー

ベルリン、一九四五年三月一日ゲッベルスも歴史的発展に頭を悩まし、それをラジオで全世界に発表しさえする。昨日彼はこう宣言した。「われわれが戦争に負けたとすれば、歴史の女神は淫売婦だ。」

1945/3/11 神谷美恵子

その独特なものを発揮するほかに私の貢献し得る途はないことがわかって来た。私の進もうとする途には何の指導著もないこと、ひとりで暗中模索するほがないこと、もはつきりわかった。ああ、何というおびただしい仕事が待っているのだろう。国は今や危機に瀕し、自分の生命もいつまであるか知れない。しかし私は生きている限り、自分に仕事に邁進せねばならない。「孤独なるニーチェ」読了。著者エリザベート・ニーチェは何という素晴らしい妹だろう。ワーズワースやバスキルの妹にも優る妹だ。

こういうあわただしい末期的世態の中で毎日暗くなるまで我を忘れて仕事と勉強をしていられるのを幸いに思う。

1945/8/2 ケストナー

- 一、一組八百個
- 二、金と自金 一キログラムの塊
- 三、シェーリング製品の新薬
- 四、去勢
- 五、金属のステッキ
- 六、「カボー」(柵組踏蹴極勘相)

1945/8/15 神谷美恵子

一日中呆然とし、夕方に至り仕事にかかる。当直。昂奮のためか二時頃就寝。久しぶりで十時過ぎても窓を開け放って勉強ができた。十二時頃、学生らしき者昂奮して、耳鼻科と整形外科の窓硝子4枚ぶち割る。

1945/8/15 中根美宝子

今日はおぼんだ。1945/8/15 こちらでは一月おくれなので今日だ。午前中体重そくていをした。国民学校のはかりをかしていただいた。ざんねんながらへってしまった。涼しい風がお教室の窓から入って来るのでとても気持がよかった。おひごるごはんになすのしげやきときうりとトマトだった。大へん大へんおいしかった。午後いり米をお八つにいただいた。それから寮に帰らないで学校に行った。夕食の時もち米のおはぎ三つとじやがいもとをいただいた。大へん大へんおいしくておなかがまんぷくした。

1945/8/15 大佛次郎

台湾も満州も朝鮮も奪われ、暫くなりとも敵軍の本土の支配を許すなり。覚悟とおりとことなるもそこまでの感切なるものあり。世間は全くの不意打ちことなりしが如し。人に依りては全く反対のよき放送を期待しありしと夕方豆腐屋篠崎来たりて語る。

1945/8/27

敵艦隊がみえるというので由比ヶ浜へ出てみる。浪の高い沖に「やあ」と苦笑を感じるばかりに垣根のように並んでいる。二十一隻が数えられた。心外だが堂々としたもので持っているなあと感心させられる。船だけでなく飛行機その他でも日本人はまもなく圧倒せられるに違いない。

1945/9/2

午食の後横浜へ行き米軍上陸の日の街を見る。門田君と歩く。ニューグランドはマッカサーが入ったことで歩哨が立っている。上陸したばかりの兵隊どもが道路に休憩し珍しいそうにこちらを見ている。野暮ったい百姓臭い奴がいると思ったら 兵である。南京街のトタンバラックには二三民国の旗が立っている。支局へ帰って来たら米人の報道班員ヤンクスの若いのが人取りいて室内を見て廻りここは我々が来て入るからと云い立ち去る。暗くならぬ内と門田君に云われひとりだけ佐木に帰って来る。歩哨が腕時計を奪ったり明治やの店などへ闖入しビール、ウィスキーなど掠奪して帰る状態なのである。

1945/9/19 佐々木光子

昭和20年 5時、夕食に立った。夕食後、お風呂に入った。茶の間にて、スイクワを皆で食べる。義兄さんが除隊をして帰ってから、家の中はますます賑やかになった。毎日楽しくなごやかな日が続くであろうか、と私は思われた。また、必ず戦争がおきるであろう、日本は必ず、立つのだ。

1945・12/5 マーク・ゲイン

十二月五日 東京

昼頃私たちは、日本の海岸線を見た。

十二月七日東京

東京は今や歴史の焦点に立つ都会だ。

十二月九日 東京

いわしは、1ダース十円だった。というのは約六十六セントに当る。(この頃は一ドル十五円に

きめられていた。以下同じ) 小さなみかんも、ほぼ同値だ。中古のスフの背広が、八十ドルする。十円は、現在一人前の男の、一日分の普通の給料だ。「禁煙」の掲示を尻目に、平気で車内で喫煙する男たちには、車掌も苦勞しているようだ。その男たちのいいぐさはこうだ。「民主主義になったんだろう? そうじゃないのかね?」

十二月十日 東京

日本に来て以来、暖かい手と握手をしたのは、アメリカ人と握手した場合だけだったことに気がついて、いまさらのようにびっくりした。日本人たちは手をあたためる機会にも滅多にめぐまれない。みんな冷たく、真っ赤な手をしている。

十二月二十日 東京

私はまた考えた、この大きな都会、いまではただ石屑とただ生きようとする執拗な意志しかもたないこの大きな都会、何町も何町も崩れ落ちた瓦礫の山しか見ることの出来ないこの都会、二、三本の煙突、床が焼け落ちると同時に地面の上に焼け落されそのままほうりっぱなしにされているたぐさんの焼け金庫、そんなものしか眼に入らずに何町でも何町でも行き過ぎることのできるこの大きな大きな都会の上を、私はそこはかとなく考えた。かつては、この東京を世界第三の大都会にそだて上げた男たち、女たち、――彼らはみんな今では田舎にひっこんでしまったか、三家族も四家族もでたった一つの部屋を分ち合ってわずかに残った家々に移り住んでいる。そして、何千、何万の人たちが、焼けて赤さびたトタンで小舎をたてたり、地下鉄や鉄道の停車場の中に引越している。朝ごとに、鉄屑やゴミの山から煙りが上る。が、その鉄屑やゴミの山はじつは家なのだ。それでも人々は、とても信じることができないほど人間の密集した事務所へ働きに出かける。そして彼らは小さな火鉢にわずかな暖をもとめて、そのまわりに肩をおしつけあって集まる。

1946/1/20~4/17 笹川良一

一月二十日日曜

恐れる位なら悪事をせぬことである。悪事をやれば度胸を据ゑることである。アホウ

◎世界皆一人残らず兄弟負ける阿保に勝つ阿保

○住みなれし巢鳴の獄を人問わば 地上天国大学と答ふ

○今は世を巢鳴の人になり果てて 娑婆は雲の外にこそ見ゆ

一月二十一日月曜

予の如き者を顧問にすれば在獄中の人一人残らず米国の味方になる様にやつて見せるがな…。

一月二十二日火曜

◎食事が不足したとて喧ましい事。番兵君岡圀君を通訳させて、食事当番は上手に盛りせぬと食はずにおらねばならぬからの注意。もつともである。不足する事は正に個人主義となり動物化した何よりの証拠である。大人物が真先に連れ、食が無くなると困ると云ふので順位の前に割込む。いやしいものである。こうした連中が今日まで日本を支配してゐたから敗けたのだ。高橋君はトマトは食へないと云つて予にくれた。予はそれに報ゆるに大きな自分の好きな梨を与へた。これが人間楽である。

四月十七日 水 雨

こんな奴が海軍大臣だつたから日本 [が] 敗けたのであり切腹せなければならぬのにオメ／＼生て恥をかきまだ若い者の為に犠牲となる考毛頭なし。まだ憎まれない様にして娑婆に出たい気持ちがあり／＼見ゑる。つまりぬ奴とて喧しい事である。年寄り特に上級軍人はズルイ。若い者の憤慨は無理ない。多い方を当方に取れば損が行かないし当然だから事は罪悪である。具口同音にこんなに喜しく食事した事はないと喜ぶ。

1946/10 ジャコメッティ プールヴァール・バルベス・ロシュアールのカフェ

その生き物を殺してくれと頼んだ。

長い棒かシャベルのようなものでそれを叩きつぶした。その人物は激しく叩いた。

鱗がさける音を聞き、柔らかな部分が押しつぶされる異様な音
鱗の上にインキで非常にはっきりと書かれている名前
ばらばらの文字、象牙のような黄色の上のインキの黒い色ばかり

骸骨のように痩せた手足は、投げ出され、ばらばらになり、身体が遠くうち捨てられ、腹部は巨大にふくれあがり、頭は後ろにのけぞり、口は開いていた。

猫の死骸のように溝に捨てるべき哀れな残骸にすぎなかった。身動きも出来ずに寝台の前に立ち止まったまま私は、オブジェとなったこの頭、物指ではかることのできる無意味な小さな箱を見つめていて。その時、一匹の蠅が口の黒い穴に近づき、そしてゆっくりとその中に姿を消した。

何人かの黒人の兵隊が外の霧の中を歩いて行った。この霧は既に前の日から異常な喜びで私を満たしていた。

1949/2/20-23 坂口安吾 & 三千代

昭和24年

- 二月二十日 睡眠二時間、メザメテ吐く、朝までネムレズ、性欲モ食欲モナシ。
二月二十一日 言葉ガ良ク喋レナイ。一日中食欲ナクネムレズ。
二月二十二日 昨夜マデノ不眠ノ間、時々女房カラ全身ヲ三十分位搔イテモラッタ。
コノ快感ガ催眠ノ快感ト同型ニ感ジラレタ。三時半ツイニ泣く。
酒ノム、ハジメテ約一時間余リネムル 睡眠ノ快感ナシ
二月二十三日 四時半二目ガサメル、女房ノ笑顔ガスグ隣リニアル、隣室カラ立上ッテ階下へ
去ル音、階下カラ立ッテ階上へ来ル音、交錯シテ起ル。
女房ノ笑顔ハイッマデモ消エナイガ、幻視ダト分ッタ。ソレカラ十秒ホドシテ、
サウダ、私ハ今第二回目ノ睡眠カラ目ガサメタノダト気ガツイタ、睡眠八一時間
二十分位。
コレガ第三回目ノ覚醒（六時三十五分）デアッタ。睡眠時間ハ二十分力三十分
ダラウ、セッカチニボリボリカキナガラ睡眠二通ジル溶解感へ昏酔シハジメタ。
_コノ日午後神経科入院
二月二十四日 アケガタカラ三回ニワケテ三時間ホド、ウトウトシタノミ覚醒時ノショツク依
然タリ。八時頃ヨリ腹痛下痢q九時頃ヨリ熟睡。八時間半。
二月二十六日 スイミン六時間半、
二月二十七日 十二時、升金、三千代来ル。

〈二十一日〉千谷先生にお目にかかるため発病以来：初めて彼はキチンと身なりをととのえて私のへやに坐っていたが、膝の上にそろえた両の拳は小刻みにふるえ、全身が時々ビクンと痙攣していた。ねむっている子供が時々全身ビクンと動かす、あんなのだった。言葉はうまく喋れなかった。舌がモッレ、ロレツが廻らなくて、どもってしまうのだ。側に坐っていた私に、

「お前の目のふちにくろい隈が出来てしまった お前の頬がこけてしまった」
そうやって私の顔をマジマジとみつめていた。私は泣きだしたいくらいうれしかった。

1954 グレアム・グリーン

ディエン・ビエン・フウ

1/5

午前七時にハノイのフランス空軍基地でディエンビエンフウへの連続往復便の飛行機を待つ

死の支配する地域に一介の非戦党員旅行者として自分がイル場合、私はいつも一種の罪の意識をもつ。

わずか二発の銃弾が母親と子供とを殺したとき、暴力は突如として哨戒隊の胸をえぐった。あの母と子はどんな恐怖を覚えたのだろうか。

1/8

9時50分 ハノイからナムジン行きの飛行機に乗る。

和やかな金色の夕日を浴びている稻田の上を、砲の音がとどろいた。一人の労司祭が私に言った。「あれから後、私はフランス語を習いだしました」

1/10

ハノイ フランス人の友人達とハノイの中国人町へ行く。

わたしはアペリティフとしてアヘンを二服、“ニューパゴダ”で晚餐をしたあと、帰ってからさらに5服を喫する。

1954/1/12 ヴィエンチャン

早起きしてラオスの行政上の首都ヴィエンチャン行きの陸軍機をつかまえる。

1954/1/16 サイゴン

いったいサイゴンがいつでも帰って来てよかったという気持ちを起こさせるのはなぜだろうか？
晚餐後、例の予備校で七服のアヘンを喫した。わたしは、教室の腰掛のあいだを通り抜けることも、木造の階段をのぼることも少しも面倒だなどとは思わず、薄闇のなかで今夜はどんな瘦せた人間たちが横になっているのが見られるのだろうかなどと考えながらアヘン窟へ入って行った。ヴェトナム人はアヘンをのむときはいつもパンツだけの裸になるので、そこには長いズボンがずらりとぶらさがっていた。

1954/1/18 サイゴン

キャフェが一軒、レストランが一軒、淫売屋が一軒、アヘン窟宮が一軒。

女は魅力的で不潔な、ほんの少し斜視の娘で、あきらかにわたし個人の快樂をみだすために呼びだされたものだった。

警署署長が言った。「アヘンは女にこしらえさせると一段と美味だという通説がありましてな」
わたしの知っている唯一のヴェトナム語は“ノオ”で、女の知っている唯一の英語は“OK”だったので、会話はこの二つの語句のあいだの慇懃な争いという形をとった。

1954/4/1 山下清

花火があがる時にははじめ火の玉が一つ高くあがってそれがはれつすると火が花のようにひらくので火で出来ている花だから花火と言うので見ていると美しくてももしろい花火があがったと思うとすぐきえてしまってきえたかと思うとまた花火があがってすぐきえてしまってまた花火があがるので花火には大きくひらくのと小さくひらくのとある

1956/9/8 佐藤栄作

九月八日土晴。

田中角栄をよんで対河野策をねる。今の段階では、岸、石井を紺み合す以外に途はない、との結論に達したので、囲中に、池田、林両氏を打診さす事とした。丙申会は意気があがらない。重光は湯河原へ6岸へ南、橋本等を差し向ける再岸としては断然ふみきった感がある。秋のリーグ戦初まる。東大予想を裏切って早大を敗る。

1958 永井荷風

昭和三十三年

五月十六日。陰晴定らず。夜雨。
 五月十七日。陰。後に晴。
 五月十八日。日曜日。晴。
 五月十九日。陰。夜雨。
 五月二十日。陰。時々雨。
 五月廿一日。陰。後に晴。
 五月廿二日。陰また晴。
 五月廿三日。陰。夜雨。
 五月廿四日。晴。
 五月廿五日。日曜日。晴。後に陰。
 五月廿六日。晴。
 五月廿七日。晴。
 五月廿八日。晴。後に陰。
 五月廿九日。晴。
 五月三十日。晴。
 五月三十一日。晴。
 六月初一。日曜日。晴。
 六月初二。晴。
 六月初三。陰。後に晴。
 六月四日。陰。
 六月五日。晴。
 六月六日。晴。
 六月七日。晴。夜雨。
 六月八日。日曜日。雨午後に欺む。
 六月九日。雨。後に陰。
 六月十日。晴。
 六月十一日。陰。
 六月十二日。晴。
 六月十三日。陰。後に晴。
 六月十四日。晴。
 六月十五日。日曜日。陰。
 六月十六日。陰。夜雨。

七月廿六日◇風俄に涼し。百日紅、夾竹桃、さざん花、むねの類皆満開。百合、向日葵、百日草、昼顔亦花のさかりなり
 白米 一升 参拾五圓
 大豆 〃 捨五圓
 小麦粉 一貫目 八捨五圓
 そば粉 〃 六拾圓
 牛肉 百匁 拾五
 馬鈴薯 一俵 百圓
 蜂蜜 一升 貳百圓

1959 グレアム。グリーン

2/8 ヨンダ コンゴ

性病は」女達のあいだではほとんど普遍的である。ただ梅毒がごく少ないだけだ。
 昼食時に、Lは蛇に咬まれた患者に血清注射をするため呼び出された。

夕方、コクへ民族舞踊をみにでかける。

1961/4/9 佐藤栄作

四月阻月八日土曇、小雨。

今週はゴルフに遠 [の] いたのでは是非行き度、その積りで来客を斯ったが、江藤君に早朝から立候補につき相談を持ち込まれる。天気も思はしくなく一方疲れもあるので、遂にゴルフ行きはとり止め、開幕の野球をテレビで見る。巨人は中目に、大毎は東急にそれぞれ第一戦を失ふ。大洋のみ広島に勝つ。

1962/5/28 堀江謙一

第17日 また、シケだ。ものすごく寝たい。

出発の前に想像していたのとは、まるでちがう。「さ・び・し・い」なんて、そんな単純なものではない。あらゆるつらさがミックスしたのが、さびしさである。ジッとしていられないほど、気分を攻めつける。まぎらわしようのない。ほんとうに、狂いだしてしまいそうだ。

第36日———どうも、太平洋の波はガメつくてイヤだ。

すごく荒れる。飯をたくどころではない。50度ちかくヒールしている。窓が水面か下にもぐる。ガラスのすぐむこうを、真っ白い波が、猛烈なスピードでバチャッと突っ走る。

1964/8/7 武田百合子

便所の臭気ひどくなる。五、六日前から、臭い臭い、と主人はいつていた。昨日あたりは、庭からも臭気が出てくるので、仕事部屋の雨戸は開め切りにして、一日中電気をつけていたが、家の中の便所からも、臭気は廊下を曲がり、階段を上ってやってくるので同じこと。昼も夜も臭い。うんこそのものの臭いというのではなく、少し粉っぽいような、ドブの臭いのまじったような、化学変化が起ったあと、うんこの臭い。「この臭いが頭の中に入って、頭がわるくなりそうだ」というから、今日は管理所に行く。しゃがんで便器のそばに顔をつけて臭いがかぐと、便器のまわりも臭う。「頭がわるくなってくる臭いがする。うちの商売、頭がわるくなると困る商売だから、すぐ直してくれ」といって管理所から工事店に電話してもらおう。電話の向うの工事店の人が聞きまちがったらしく「電気がわるいのはねえだ。便器だ。電気がわるくて臭くはねえぞ。頭めぐるして考えでみれや」と、管理所の人に怒られている。怒るといっても悠長な静かな声でいつている。ついでに、ほかのわるいどころ、西側の雨漏りなど直すようにいう。一

1964/5/16 ジャコメッティ

一切は描きえぬまま不可能のうちに消え去り、描くべきものがありすぎ、積み重ねたものは散らばり、結局は椅子の脚もとの、寝台のシーツ、どことわずどこかの片隅、その、感ヴァスの張り枠の脇にある箱の足下のテレピン油の瓶、あるいは別のアトリエの帚木、猫の食物が空になっている箱と電話室

静かだ。私はいま一人、夜の外にいる、一切は動かず、眠りがまた私をとらえる。自分が年を老っているのか若いのか分からず、恐らく死ぬまであと何十万年かはいきるであろう、私の過去は灰色の謎のなかに消え、私は蛇であったがいまは口を大きくあけた鱈だ。あれは私、口を大きくあけて這う鱈だった。空気が震えるほどに叫び吠えたと、マッチがちらほら地面に灰色の海の戦艦のようにもえている。

1965 10/4 ジャコメッティ

終わりがなく、名前のないこの海の真ん中で。私が沈み込むかも知れないこの黒い水、盲目で名前のない魚が私をむさぼり食うかも知れないこの闇黒の水の

10/18

海が全てを覆ってしまう、今日大西洋と呼ばれているが、わたしにとっては海には名前がない。何百万年ものあいだ海にば名前がなかったし、いつかはもはや名前をもたなくなるだろう。終りなく、盲目で、残酷なものになるだろう、それらは日に日に毀れ、色あせ、崩壊していき、その多くが私のとくに好きな多くのもろもろとも、すでに埋没し、砂、土、石の下に沈んでしまった。ない。

いまではわたしは十二才のときのわたしと同じだ

11/30

わたしはもはや現実にはしか関心をもっていない。わたしはただ一つの椅子を模写することだけで生涯の残りをついやすことができるだろう

1968/6/19 高野悦子

アッハッハッハッ。君。失恋とは恋を失うと書くのだけ。失うべき恋を、君はそのなんとかいう奴との間にもっていたとでもいうのか。共有するものがなんにもないのに恋だって？ 全くこっけいさ。君は昨日も行っていたじゃないか。「何もない空間で、車輪を急回転に空回りさせただけだ」ってね。君はそのなんとかいうやつを愛していたって？ 君、そんなふうにあつて愛という言葉を使ってもらっては困るネエ。君はそのなんとかいうやつを愛そうとしていただけなのだ。君のエゴは、たえず、そのなんとかいうやつを私有しようとしていた。君はそのエゴをかくそうとして愛していたなんて言葉を並べただけなのだ。そうさ。君にいま残っているものは憎しみさ。アッハッハッハッ。こっけいだねえ。君という人間は全く楽しい人物だ。そんなことを書いて、ひそかに喜びさえ感じているんだから

197 /9/20 武田百合子

そっと抱きかかえるとそのままになって、足を投げ出して抱かれている。じいっとしていると、ふざけたように顔をこすりつけてくる。顔は笑ったまま、眼はとじたままにして。黄色い顔をしている。目の中で何か言っている。「意識がこん濁しちゃうんだ。どこにいるのかなあ」と言っている。足が少し震えている。じいっとだいたままにしている

1971/6/4 永山則夫

私は 怒鳴りつけた。「ばかやろう、よく知りもしないで下司な勤ぐりは辞めろ。お前さんたちこそ何だ、自分のやっていることが天下一正しいと思っているのか、自分中心に地球が回っていると思っているのか。あたしや、こんなこと飯の種にしない、だって書くことは死ぬまで不自由しねえんだからな」

千葉敦子

新聞記者になりたいと思った 新聞記者になった 経済記事を日本語で書いた 経済記事を英語で書いた ニュースを書いた コラムを書いた 世界を旅したいと思った 世界を旅した プラハで恋をした パリで恋を失った リスボンでファドを聞いた カルグリで金鉞の中を歩いた 本を書きたいと思った 本を書いた 若い女性のために害いだ 病んでいる人のために書いた 笑いながら書いた 歯をくいしばって書いた 、

1978 ブゴウスキー

しばらくしてからわたしたちは注文をした。別のウェイターだった。滑って転んだウェイターはどこにも見当たらない。多分トイレでマスターベーションをしているか、さもなければ母親に電話をかけているのだろう。

1978/4/28 植村直巳

晴れ マイナス18-20度 北東の風マイナス十八度の気温は北極圏ではもう夏のような感じで

来る日も 来る日も この鉄棒をふるった

1978/6/7 植村直巳

快晴 マイナス13度 西の風

「白熊よ、許せ」

体重二百五十キロ、頭から尻まで二・ニメートルの獲物だった。

この自熊は何日もものを食べずに、自分の嗅覚を信じて、ここまで来た。こんな事を言うのはおかしいが、白熊の不測の死が衰れに思えてならない。

私にもいつか、このような不測の死が訪れるのだろうか。

1980/12/30 大橋定代 正月準備

白インゲン二袋 午前中炊く。黒豆一袋 やわらかくなったら、汁を絞って、砂糖、塩づけを煮詰め、豆を浸す。一晩中以上つけこむ。これも午前中に終わる。午後、魚屋、肉屋。酒類は、日本酒一本でよい。ビールは、1ダースがよい。みかんは、暮れの歳暮で間に合ったので買わず。花は蘭一鉢、1500円、求めたあとは、せんりょう、白菊、黄菊の小菊に、すいせん3本、980円で思い切ってすませてしまった。結構これですんでしまった。明太子1000円十本入り。冷凍カニ1200円。3箱。筋子、1980円 1540円 1000円 3箱。数の子 3600円 2箱。そば 600円。輪飾り、300円。パパがアメ横で購入。午後3時出発。遅く行くと良い。

1982-1985 宮内美沙子

「あーあ。これじゃ、俺も人間は廃業だ。もうおしまいよ……」

「看護婦さん、どっかに穴でも掘って埋めて下さいよ」……失禁がはじまった高齢患者の反応は、さまざまである。汚れた寝巻きや下着をかくす人。これは失禁ではないと懸命にうち消す人。自分がなさけないと、心身共に落ち込んでしまう人…… いずれも、人間の誇りと尊厳を失ったような、大きな衝撃をうけ、打ちのめされている。

1982/5/16 ペーターノル

「癌の本」は、ほんとうの文学のジャンルになった。

1982/7/6 7/9 ペーターノル

頭痛とか腹痛などのように、痛みの箇所を突きとめることはできても、痛みをその量に従って述べることはほとんどできないし、その質についてはまったくあらかわせない。……、たとえば、**睾丸の打撲傷の際に生じる恐ろしい痛み**をどう書いたらいいんだ。色(赤、緑など)や形(丸、四角など)には、それをそのままあらわすことばがあるのに、痛みの性質にはそのことばがない。痛みはまったく主観的なものです……。痛みをあらわすことばがないので、痛みとつき合

うことはむずかしいqわたしの痛みは今ある。鈍くて重苦しい。でも、その痛みを言いあらわせない。他人の同じような経験をあてにすることができないからだ。痛みどめで痛みを和らげ、ときには長いこと吹き飛ばしてくれもする。ときどき、一種の精神分裂も起こる。つまりは、精神の高揚状態もあるが、静かな厳しい観察者である痛みもあるのだ。だれもが限りなく多くの種類の痛みをしのんできた。でも、だれも人に痛みを伝えることができないのは、痛みを引き起こしたのとまったく同じ外的出来事を、相手が体験していないからだ。そういう場合、伝えることは不確かになる。腕をナイフで刺したら、だれも同じように感じるのか

1987 1/17 強風 藤原マキ

「おんなはオベンジョだけはいつもきれいにしときや」と、大阪の母はよく言っていた。その頃はめんどくさそうに聞いていたが、あんな病気（子宮癌）にかかってしまったのはバチが当たったのかもしれない……。明日は病院へ行くつもりなので、風呂、洗面台みがき、トイレはとくにテッテ的にやった。

1987/12 ドリアン助川

俺たちは兄弟じゃないか。だめな兄弟じゃないが一お前の気持ちは俺がわかるけどこれだけは言わせてくれ、未来はあるか。捨てるなHさん。いつか季節が変わったら必ず会いに行きます。もしもそんな日がくるのなら
粉々になるまで働いて、それでたまった家賃を払おう。岐早に行くか。夏紀には何と言おう

1988/7/16 ドリアン助川

何だか笑えてきた。酒も飲んでいないのに笑いがこみ上げてくる。とうとう気が狂ってしまったのかとも思われたが、冷静な自分もどこかにいる。何もかもなくなってしまっ、あまりにも閑散としているから俺は笑ったのだろう。

ふいに生きてやろうという気持ちがわいてきた。

もう俺はゼロなのだから、これ以上失うものはない。

金、職、才能、その全てがないのだ。

明日からはマグロ漁船に乗ったところで、だれも悲しまない。アフリカに行っても。誰も気がつかない。神様は俺に余分なものはくれなかった。世の中をすいすい歩いていける道具はくれなかった。この体と、失意と、この憎しみだけ。

1991/5/6 平出隆

「粘膜に被われただけの骨をもって内壁とする空間は、鼻孔から入った場合、甲介と呼ばれる棚状の三つの極端なでっぱりによってすでに複雑化されているのだが、その奥まったところには、上顎に接する上顎洞への出入り口があき、頭部の中心近くでは、脳下垂体を容れる蝶形骨の囲む蝶形骨洞への遣が通じ、眉間のほうでは、くだんの蜂の巣状の縮骨潤へと孔がひらき、その箭の構造を上へ抜けていくと、成人しても形状がゆるゆる変りつづけるという不思議をもつ、おでこの下の前頭洞がある だが、そうしだすべてには、b原理的なシンメトリーが支配している。鼻梁の付根の其下には、正面か・ら刃をぷかく刺し込んだように正中板と呼ばれる板状の骨が埋まってあり、これと連続して鼻梁を支えるものとして、鼻中幅なる軟骨が頭部内空間を縦に仕切っているのである

1992/6/23 火曜日 ブラータ

ミミーさま きょう、中央市場と教会に砲弾が落ちました。ゆうべ八時からずっと電気がとまったまま。もう夜十時半なのにまだもどりません。もういや!!

1992/6/24 水曜日

ミミーさま 午前九時四十五分——水が出るようになりました。電気はまだです。午前十時半——まだ水が出ています。正午——水は出なくなったけど、電気が通じるようになりました。

やったね!!

ミミー、いま気がついたんだけど、友だちがみんな行ってしまっ、だれもいないの。オーガ、マルティナ、マテア、デヤン、ヴァーニャにアンドレイも。えーん

1992/6/29 月曜日

ミミーさま 退屈、銃撃、砲撃、殺戮！絶望！飢え！苦痛！恐怖！これがわたしの、罪もない十一歳の小学生の毎日です。

1992/7/3 金曜日

ミミーさま ママは砲撃がないときは仕事に行きます。

ママが出かけるとき、いつもパパとわたしは窓のそばでママが走るのを見えています。「ミリヤツカがあんなに広い川だって知らなかったわ。走っても走っても向こうへ着かないんだもの」とママは言います。これが恐怖つものよ、ミミー。弾にあたるかもしれないという恐怖です。

1992/7/5 日曜日 ズラータ

ミミーさま 最後に外へ出たのがいつだったか、おぼえていません。もう二ヶ月近く前じゃないかしら、おじいちゃんとおばあちゃんに会いたい。

1993/12/8 サキ

8ヶ月頃の写真で「ウワーン」と泣いている写真があるのですが、そういえば その自分の写真を見て 何日か前「エーン」と言っていました。そして昨夜 また知人宅へ向かうとき赤ん坊とすれ違ったあと「エーン」と言っていました。この2、3日で増えた単語は「リンゴ」「パンダ」「パン」「暗い」「たっち」

1994/2/7 サキ

「アー」と語りかけると「アー」と答え 「アー」の会話がつづけられるようになってきました。同じ「アー」の中にいろいろな感情の変化（甘え、イラ立ち、優しい語りかけ、etc）が見られます。この2、3日で顔が見えないとすぐ泣いて、後を追いかけてたり、私の行く先々へ、ついてきたり、の後追いが出てきました。

1994● M.デュラス

Pour Yann.

On ne sair jamais, avant.

Ce qu'on écrit.

Depeche-toi de penser a moi.

Pour Yann mon amant den la nuit.

Signe : Marguerite, L'aimante de

Cet amant adore, le 20 novembre

1994, Paris, rue Saint-Benoit.

Il n'y a pas de dernier baiser.

Plus tard encore.

Il ne faut pas vous en faire pour
le fric.

C'est tout.

Je n'ai plus a dire.

Pas meme un mot.

Rien a dire.

Allons faire cent metres sur la route.

Dimanche 9 avril, Les Rameaux.

Samedi 8 juillet, 14 heures, a

Neaupble.

Je n'ai plus rien dans la tete.
Que des choses vides.

Silence, et puis.

Cay y est.
Je suis morte.
C'est fini.

Silece, et puis.

Ce soir on va manger quelque
chose de tres fort. Un plat chinois
par exemple. Un plat de la Chine
destruite.

Le 10 juillet a Neaupble.

Vous devenez beau.
Je vous regarde.
Vous etes. Yann Andrea Steiner.

Le 31 juillet.

Quelle est ma verite a moi?
Si tu la connais, dis-la-moi.

Je suis perdue.

Regarde-moi.

Le L aout, lapres-midi.

Je crois que c'est termine. Que ma
Vie c'est fini.

Je ne suis plus rien.

Je suis devenue completement
Effrayante.

Je ne tiens plus ensemble.

Yiens vite.

Je n'ai plus de bouche, plus de
Visage.

1997/5/13-5/14 パチンコ野郎 インターネット

投資 12000 円 換金 1600 円 収支 -10400 円 0勝2敗

1997/7/17

投資 1000 円 換金 44000 円 収支 +43000 円

1997/8/13

またも忙しくてパチンコに行っていない…。あの光輝くパチンコ三昧の日々が、ちょっとだけ懐かしかったりする今日この頃。

1997/9/1

負ければ悔しくてまた行きたくなり、勝てば気分が良く、また行きたくなる。昔から変わらぬパチンコの魔力なり。今日は2匹目のドジョウを狙ってP店克蘭キー。

1997/9/2-9/6

投資 29000 円 換金 132000 円

1998/5/17 大橋定代 運動会弁当。

鮭おにぎり、4個。うめぼしおにぎり、3個。白おにぎり、小2個。 厚焼き玉子。茹で玉子3個。紅白かまぼこ。ウインナー。キュウリ漬物。煮物、にんじん、こんにゃく、ごぼう、牛肉。

1999/1/5 インターネット

さっき、ようやく大掃除を始めました。とても、今日中には終わりそうにないけど。

99年はシンプルがテーマなのです。

古本屋へ雑誌・CDは持っていく 洋服は半年着ていないのは捨てる

絨毯をやめてフローリングにする 今 使っていない基礎化粧品は捨てる

実行します。

1999/5/17 インターネット

東京国際レズビアン&ゲイ映画祭コンテストの審査の結果、なんとグランプリを受賞しました。

1998/11/22, 23 インターネット

第6回フェイクレディツアー参加&取材。那須塩原一泊二日旅行。いやあ、噂に違わずすごい旅行でした。さすがに女装者が13人もそろうとは壮観！ 村の人や宿の人の反応も面白いけど、男子更衣室や男湯の客の驚いた表情はもっと面白い。 主宰者の三橋順子さん、同室だった裕乃妃さん、桜井真亜紗さん、それから、渡辺美樹さん、早瀬ゆうさん、山本仁美さん、小谷理美さん、南愛美さん、山口秋美さん、宮城みちこさん、香山リカさん、エルさん、ショウさん、ご協力&仲良くしてくださって、どうも有り難うございました。

カミュ

11月-32歳

人間のもっとも自然な性向は、自分を破壊し、自分と一緒にみんなも道ずれに使用とすることだ。たんに正常であるだけのために、どれほど並外れた努力が必要になることか！

1/6 カミュ

丸何日も雨が降り続き、冷たい風が。あちらのアムステルダムではすべてが真新しくびかびかしており、アムステルダムはびしょ濡れだった。ここハーグでは、ハンドルの高い自転車に跨がった人びとが、まるで冷たいホフヘイフェルの周りを不吉な叫び声をたて飛び回る白鳥のように、魚市場の生きた鰻や、そこらじゅうの地面に貼りついている枯葉と同じ色の汚いショーウインドーに飾られた素敵なお宝や、長い間古ぼけた金色の海を泳いでいた煉の燻製の間を走り回っている。おお、ジパングよ、あちらでもこちらでも オランダよ、美し国オランダよ、ここではみんな死ぬための忍耐を学んでいる。

8/2 カミュ

八月二日 **ぼくは無理をしてこの日記を書いている。**しかし嫌悪感が強い。どうして今まで日記をつけなかったのかが、いまにして分かる。生は秘密なのだ。生は他者にたいして秘密なのだ。しかし生はまたぼく自身の目にたいしても秘密でなければならない。ぼくはそれを言葉のうちに表してはならないのだ。ぼくにとって生が豊かになるのは、うちに籠もって、形を与えられないときなのだ。ぼくが無理に日記をつけようとしているのは、自分の記憶力の弱さが怖いからだ。しかし続けられるかどうか自信がない。それに、続けられたにしても、多くのことを書き忘れてしまう。それにぼくは自分が考えていることについてはなにも語らない。例えば、Kについて長々と考えたというようなことは。

9月4日 ボーヴォワール

青一色の部屋で八時に目をさますと、疲れもとれ、普段の目覚めの時の気持が一瞬よみがえる。これから始まる一日を前にしたあの幸福感、あのゆとり。前日の世界を再び見出さなくてはいけないのが〈大仕事〉も同然に思われる。ジェジェにおはようを言う、ツェジェは家族のことでも、リムーザン地方へ行くことでも頭を抱えている。パルドもまして、紅茶と、ジャムで朝食にし、私はお風呂に入る。

日々には一定のリズムがある。朝と晩では天と地ほども開きがある。晩、それは興奮、腐敗、酔いつぶれよう、泣きじやくろう、何だかってやってやると思い、人混みの中で自分を見失う。朝は明晰そのものC昨日の朝よりずっと落ち着いている。ポストのためにラドレッサン誌を買おうと、サン・ミッシェル大通りに歩いて行く。リュクサンブール公園に兵隊がいる。すばらしい秋の朝、黄金色に色づいたマ画工の本々、枯葉の匂い。小さな気晴らしのことを考える、ラドレッサン誌を読むこと、ジッドを読むこと。サルトルは死なない、たぶんポストも死なない、と自ってみる、すると、私にとっては万事が、万人がどうしてもよいのがわかる。不幸せではない、昨日も不幸せだったわけではない。おぞましい世界は私の外部にある、そして今朝、これから一、二時間、私は世界から身を引く。ギーユのところのバルコニーに赤い花と、管理人だろう、女の人が覚える。ラドレッサン誌を買って、《カブラード》で読む。戦争はどこにもない。

私は不幸せではない、人生を反省しないから。〈幸福〉と〈不幸〉というものも、そもそも、人生、というものも、もはや存在しない。同時に、意志、後悔、希望が調和し、その間に〈小ぜりあい〉が起きない。何も求めず、何も期待せず、後悔を超越している。一種の平安。

1940/1/3 ボーヴォワール

キスが始まる。…「本当に完全な関係にしたい？それとも今のままにする？」「お好きなように」という返事。だからそれ以上何もしない—ところが間もなくソロキヌが興奮し、憎らし気に私を見つめ、拳固でなぐクかかり、枕に顔を埋めてしまう。…彼女の緊張がゆるむ。「お互いに偽るのは絶対いや！」偽ってなどいない、と私、ぜひもっと先に進みたい。…たとえば服を着たままとそうでないのでは違う…「中途半端は良くないわ、そこで私が彼女の服を少しずつ脱がせ始めると、「電気を消して」「いやなの？」「電気を消してくれれば平気」。「全部脱いだら？」と水を向けると、ぎょっとした笑い、「いや全部はいや」。「先生はおいや？全部脱ぐのが」「とんでもない」。私はブラウスを脱ぐ。…「どうせなら、いくところまでいぎましよう、でも電気はつけなくて1」そこでペヅドに入る。裸でいるせいで身動きもならず、かと言ってこの経験に胸をとぎめかせてもいる彼女を腕に抱いていると、奇妙でもあり愉快でもある。少し愛撫する、でもごく短い時間。官能はさっぱりない。彼女もそうだと思う、恥ずかしくて小さくなっているから。「お互いに偽りはない」し、「氷いらずの感し」だから彼女は満足。おしやべりをする。闇の中で彼女がいろいろ尋ねる。「こんなふうにサルトルと寝るの？」「彼は胸毛が生えている？」「裸で先生の前を歩き回る？」うぶな娘の雄に対する嫌悪感。……「服を脱ぐ時と、また着る時がおかしいの」。

1940/6/9 ボーヴォワール

書きながらすすり泣き、＜私たちは引き離される＞とばかり考えていた。…互いに消息も知れず、手紙も届かず、一人きりで、他の者の不安を想像して己の不安を倍加させている、この考えは耐えがたかった見切りをつけ、断念するその瞬間——抵抗し、「ノン」、「いやだ」と言っている。一度見切りをつけると、苦悩の種すら消え、単に何もない状態になる。

ホテルへ戻ると、もぬけのから…強制収容所に送られたオーストリア人女性が残していったまじいシャンパンを飲んだ。少しましな気分になった。…クロード・ベルナル街の食料晶屋は店を閉め、辺り一帯がからになりつつあった。…それより何より、一刻も早くけりをつけたい、いつ果てるとも知れないこのバリとの別れは耐えがたい——一言も口をきかず、そこに坐り続けた。……あの日の昼下がり、その後何度となくお目に掛かることになった例の避難民の巨大な荷車を初めて見た。それぞれが四、五頭の馬をつなぎ、干し草を積み、緑色の幌でその片側を守っている10台ほどの二輪の大きな荷馬車——両端に自転車とマットレスを積み重ね、中央に人間が乗って大きな傘をさし、身動きしない集団をつくっている——一枚の絵のように正確な構図をなし、

追加

1919・2・27 ジャコメッティ

肉を食べないおかげで、胃の調子がよい。腹が上にあがった。前は下に下がっていた。さがっていたのは、腸が膨れていたせいだ。肉を食べると膨れることが分かった。肉は胃を平静にしておかない。前は胃が痛んだが、今は痛まない。医者は私の言っていることはすべてばかげていると言うだろう。肉を食べなければだめだ。肉は必須食品だからと言うだろう。私に言わせれば、肉は必要ではない。肉は性欲をかきたてる。私の場合、肉を食べなくなってから性欲がなくなった。肉は恐ろしいものだ。肉を食べる子供は自慰をする。若い女の子や男の子は自慰をする。おとなの男女も、いっしょに、あるいは別々に、自慰をする。